

旧長崎県師範学校関係美術科教育用図書調査報告

針貝 綾

A Report on Books for Art Education including books of the Nagasaki Prefectural Normal School Collection

Aya HARIKAI

Summary :

I checked the 50 books for art education in a part of collection of Nagasaki Prefectural Normal School, the predecessor of present Faculty of Education of Nagasaki University. As a result of my survey, following was made clear. The part consists of books collected between 1897 and 1944. And the collection includes authorized textbook and national textbook for pupils, student and teachers and also includes the materials for classes. These books might be helpful for examining the history of art education in Japan.

はじめに

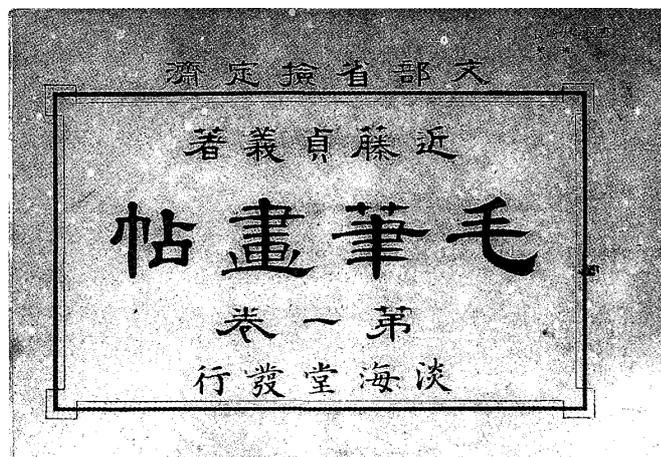
今回、旧長崎県師範学校関係資料公開に先駆けて、旧長崎県師範学校関係資料として別置されていた未整理の蔵書中の美術科教育用図書50冊の調査を行った。以下、図書を教科書、授業資料、指導書、一般美術書に分け、原則として年代順に列挙する。

1. 教科書

1.1. 尋常小学校・高等小学校用 明治5年(1872)～昭和15年(1940)

・近藤貞義『毛筆画帖 第一巻』淡海堂 明治29年 17.2×24.1cm
12頁(注1)

アーネスト・フェノロサや岡倉天心らが提唱した毛筆画教育は、日本の美術教育における西洋化に対抗して明治後期に普及した。近藤貞義『毛筆画帖』一頁目には対象学年、作画の際に使用すべき筆、描き方について次のように説明されている。



「本画帖ハ小学尋常科第三年級ヨリ高等科第四年級迄毎級二冊ツツ用ユルノ目的ニテ編成セリ

本画帖ヲ練習スルニ用キル筆ハ其太サ直径三分位ニシテ鹿毛ノ水筆ヲ適当トス
執筆ハ食指一本ヲ懸必ス筆ヲ直立セシメ而粗大ナル物ヲ描ク時ハ腕ニシテ運筆シ細小ナル者ハ腕ヲ机上ニ置キテ画クベシ

描法ハ直線曲線共横及斜ノ向ニ在ル者ハ左ヨリ始テ右ニ終リ縦ニ在ル者ハ上ヨリ始メテ下ニ終ル者トス諸物皆坎順序ニ従ヒ臨画(注2)シ然細ノ部分□臨本(注3)ト違ハザル様努ムベシ又一旦筆ヲ下シタル上ハ誤ヲ生スルモ是ヲ直ス可カラス依テ直ニ画キ難キ者ハ先焼筆ニテ下圍ヲ作り其形状ハ臨本ヨリ少ク大ニ画クベシ而ノ一題ヲ臨画シタル毎ニ其画法ヲ応用シテ夫ト類似ノ実物ヲ真写スル者トス

都ニテ物ヲ画ニ□其横リタル者ハ左ヨリ始メテ右ニ終リ直立シタル者ハ上ヨリ始テ終リ重複シタル者ハ前ヨリ始テ後ニ終リ而ノ主ヨリ副ニ及ヒ大ヨリ細ニ及ヘシ

菜果ハ其主トスル物ヨリ始メ夫ニ附属シタル枝葉ノ類ハ後ニ画ク者トス

花卉ハ先其花ヨリ画キ次ニ枝葉ヲ画クベシ動物ハ都テ頭部ヨリ画キ夫ヨリ首ヲ経テ背ニ移リ次ニ腹及ヒ足又ハ尾ニ至テ終ルベシ而シテ其魚類ニ於テハ頭ヨリ始メテ背ニ移リ次ニ口目次ニ鰓鱗ヨリ腹尾ニ至ルヘシ其鳥類ニ於テハ嘴ヨリ始メ次ニ目次ニ頭ヨリ首ヲ経テ背ニ移リ翼及尾ヲ画キ腹ヨリ足ニ及ヘシ其獸類ニ於テハ耳又ハ額ヨリ始メ口咽喉ニ移リ次ニ目次ニ頭ヨリ首ヲ経テ背ニ移リ腹足ヨリ尾ニ至テ終ルベシ人物ハ顔ヨリ始メ其顔ニ於テハ第一ニ目次ニ鼻次ニ口次ニ耳夫ヨリ首襟ニ移リ次ニ袖及ヒ手次ニ帯ヨリ裾ニ至リ足ニテ終ルベシ

景色ハ前景或ハ其主トスル者ヨリ始メテ遠景ニ及ブベシ」

こうした毛筆画の教科書は明治21年から明治45年頃まで出版され、尋常小学校、高等小学校、師範学校等における図画教育に用いられた。

- ・近藤貞義『毛筆画帖 第二巻』淡海堂 明治29年 17.2 × 24.1cm 14頁
 - ・近藤貞義『毛筆画帖 第三巻』淡海堂 明治29年 17.2 × 24.1cm 12頁
 - ・近藤貞義『毛筆画帖 第五巻』淡海堂 明治29年 17.2 × 24.1cm 12頁
 - ・近藤貞義『毛筆画帖 第六巻』淡海堂 明治29年 17.2 × 24.1cm 12頁
- 第四巻は欠落している。以上すべて和紙。

- ・荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科一年級 別号上編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁 (注4)



- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科一年級 別号下編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科二年級 上編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科二年級 下編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科三年級 上編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁 (ページ欠落あり)
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科三年級 下編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科四年級 上編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁
- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科四年級 下編』金港堂書籍 明治29年 16.9 × 24.5cm 12頁

以上すべて和紙。『小学 毛筆画手本 高等科四年級 上編』は灰色の一色摺り。『小学 毛筆画手本 高等科四年級 下編』のみ多色摺り。表紙には長崎県東彼杵郡大村高等小学校の印あり。

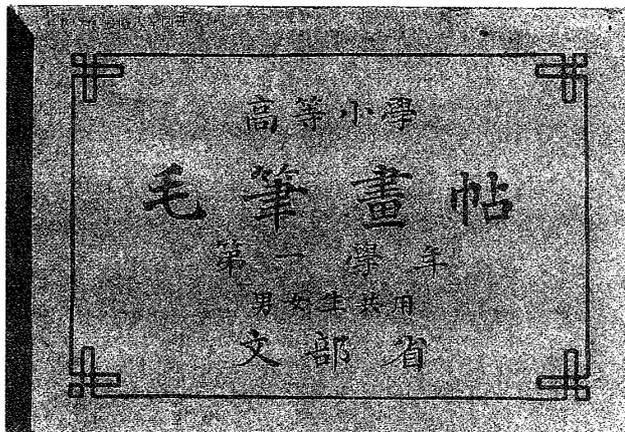
- 佐藤愛橘, 神戸直吉『新編毛筆画手本 高等科児童用 卷二』光風館書店 明治33年 17.9 × 24.8cm 12頁 和紙 (注4a)



- 文部省『尋常小学 新定画帖 第五学年 男生用』東京書籍 明治43年 15.0 × 22.1cm 24頁 カラー
- 文部省『高等小学 新定画帖 第三学年 男女生共用』日本書籍 大正元年 14.8 × 22.1cm 15頁 カラー

『新定画帖』は鉛筆画, 毛筆画併用型教科書。それまでの教科書のように臨本として使用することを目的とせず, 写生画や図案の作品は制作の際の参考として掲載されている。さらに, 色彩や作図法の説明が加わり, 今日の図画工作の教科書に近づいている。

- ・文部省『高等小学 毛筆画帖 第一学年 男女生共用』日本書籍 大正元年 14.9 × 22.1cm 15頁 カラー



- ・初等図書研究会『改訂 新撰 小学図画 二』三省堂 昭和6年 23.5 × 16.5mm 16頁 (ページの欠落あり) カラー



『改訂 新撰 小学図画 二』は小学2年生の図画の教科書である。その緒言において、初等図画研究会長岡田三郎助（注5）は次のように述べている。

「本書は文部省令に準拠し、且つ新時代の図画教育の要求を十分に省察して編纂したもので、児童の芸術的芽生を育成し、美術思想の涵養、情操陶冶の養成、鑑賞能力の開発等に就いては編纂上深重な考慮を払ひ、此の方面の材料を豊富に採択し、更に用器画方面をも加味して、児童知能の精確且つ芸術的発育を、円満ならしめることに用意を怠らなかつた。幸いにして本書が我が若き国民の美的教養を昂め将来我国の美術工藝発展の基礎の一石ともなる秋あらば編者として本懐の至である。」

運動場を描く際、陰影の付け方に注意を促す中川紀元の言葉が添えられているのが珍しい。この教科書には参考図版として生徒の作品の他、先生の作品が多数掲載されている

が、「満艦飾」、「飛行機」「飛行船」「軍艦」「航空母艦」などのモチーフは、この教科書が大戦間（1931年）に発行されたことを物語っている。

- 文部省『尋常 小学図画 第二学年 児童用』東京書籍 昭和7年 15.0 × 21.1cm 26頁
- 文部省『尋常 小学図画 第五学年 男児用』東京書籍 昭和9年 14.9 × 21.1cm 27頁
- 文部省『尋常 小学図画 第五学年 女児用』東京書籍 昭和11年 15.0 × 21.4cm 21頁
- 文部省『尋常 小学図画 第六学年 男児用』東京書籍 昭和9年 15.0 × 21.2cm 17頁

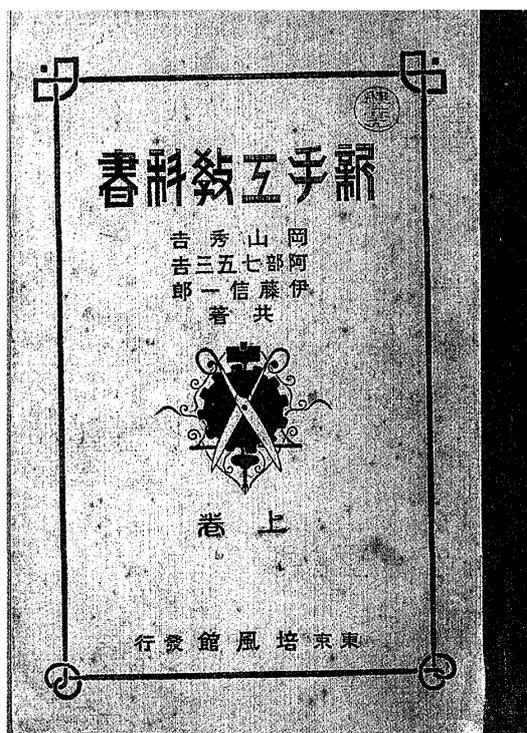
1.2. 国民学校用 昭和16年（1941）～昭和21年（1946）

• 文部省『エノホン 二』大阪書籍 昭和16年 15.1 × 21.0cm 38頁（ページ欠落あり）
表紙に新興善国民学校の印、「削除修正済」の文字。また、目次ページ3, 14, 23, 24, 25番に検閲の跡あり。

- 文部省『初等科図画 二 男子用』大阪書籍 昭和17年 15.1 × 21.0cm 48頁
- 文部省『初等科図画 二 女子用』大阪書籍 昭和17年 14.9 × 21.0cm 32頁
- 文部省『初等科図画 三 男子用』大阪書籍 昭和17年 15.0 × 21.0cm 48頁
- 文部省『初等科図画 三 女子用』東京書籍 昭和18年 14.9 × 21.0cm
- 文部省『高等科図画一 第一学年 男子用』大阪書籍 昭和19年 15.1 × 21.0cm 46頁
- 文部省『高等科図画一 第一学年 女子用』大阪書籍 昭和19年 14.9 × 21.0cm 56頁

1.3. 師範学校用

- 文部省『師範図画 本科用 卷一』師範学校教科書 昭和18年 25.5 × 18.2cm 158頁
- 岡山秀吉, 安部七五三吉, 伊藤信一郎共著『新手工教科書 上巻』培風館 昭和3年（注6）22.0 × 15.0cm 320頁



『新手工教科書 上巻』の序には次のようにある。

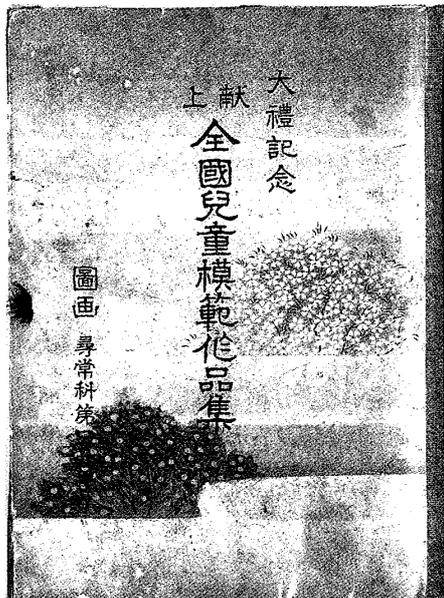
「現代の教育思想は、頗る多種多様であるが、この間に於て、最も注目すべき一事は、その何れもが行動学習を重んじ、随つて手工教育を以て、その実際方法の重要手段とすることである。今回我が政府が小学校令の一部改正に於て、手工科を高等小学校の必修科とせられたるが如きも、蓋しこの大勢に順應せる、我が国教育進歩の現はれに外ならないと思ふ。この時期に際し、この種教育の発展を図るの途は種々あれども、就中徹底的の方法は、師範学校の手工科を改善し、この教育に対して、識見と技量と趣味とを併有する、多数の良教員を養成するに在る。而して師範教育に用ふべき適当なる手工教科書の発刊は、この目的を達するに於いて、頗る有意義のことたるを信ずる。これ予等が微力を集めて、ここに本書を著作するに至った所以である。」

つまり、この教科書は小学校令の一部改正により手工科が高等小学校の必修科とされたのに伴って、師範学校の手工科のための新しい教科書として作られたものである。具体的には、「本書二巻は、師範学校本科第一部の教科用に充つるを以て目的とし、上巻を以てその第一・二学年と第三学年の一部用、下巻を以て、その第三学年の一部分と第四・五学年用とした。」また、「本書は、師範学校本科第一部の教科用に充つるを以て旨としたれど、その他、師範学校本科第二部・高等小学校の手工科及び工業科・工業補習学校等の参考用として、適するものなることを信ずる。」とある。師範学校本科第一部・第二部及び工業科の学習にも応用できる教科書であると述べられている通り、この教科書は充実した内容を誇る。尚、手工は小学校・中等学校の旧教科の一つ。現在の小学校の図画工作、中学校の技術家庭科の前身である。

・岡山秀吉，安部七五三吉，伊藤信一郎共著『新手工教科書 下巻』培風館 昭和3年
22.0 × 15.0cm 356頁

2. 授業資料

・国民新聞社『大禮記念 献上 全国児童模範作品集 図画 尋常科第三・四学年』三省堂 昭和4年 24.4 × 17.5cm 29頁



- 和田三造編『配色総鑑一』博美社 昭和8年 19.6 × 13.3cm (注7)
- 和田三造編『配色総鑑二』博美社 昭和8年 19.6 × 13.3cm
- 和田三造編『配色総鑑三』博美社 昭和8年 19.6 × 13.3cm
- 和田三造編『配色総鑑四』博美社 昭和9年 19.6 × 13.3cm
- 和田三造編『配色総鑑五』博美社 昭和9年 19.6 × 13.3cm
- 和田三造編『配色総鑑六』博美社 昭和9年 19.6 × 13.3cm
- 和田三造編『配色総鑑 概説と其活用』博美社 昭和9年 18.8 × 13.0cm

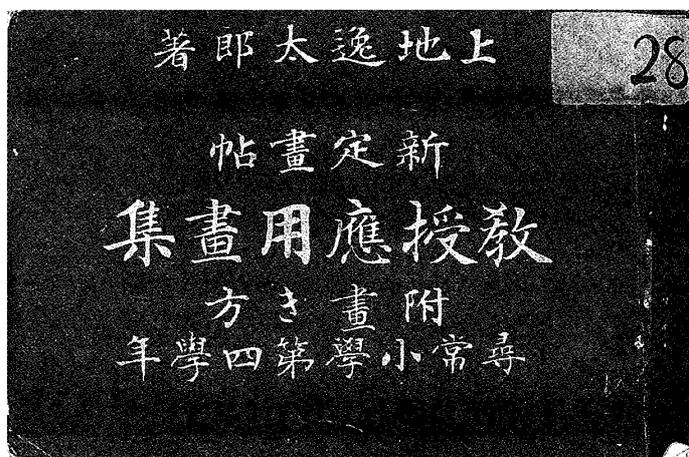
3. 指導書

- 荒木寛畝『小学 毛筆画手本 高等科教授法』金港堂書籍 明治29年 17.6 × 24.7cm
24頁 (ページ欠落あり) 多色摺り



表紙右上に×で消された長崎県東彼杵大村高等小学校印，左上に長崎県東彼杵郡大村尋常高等小学校の印あり。

- 上地逸太郎『新定画帖 教授應用画集 附画き方 尋常小学第四学年』東京六合館 明治44年? 12.9 × 19.2cm 35頁



中表紙に長崎県女子師範学校附属小学校の印あり。

『新定画帖 教授應用画集 尋常小学第四学年』の凡例には本書の使用方法が次のよう

に説明されている。

「三. 本書載する処の應用画は児童各自をして之を臨写(注8)せしむるの主意にあらず唯教授者が研究の資料に充て且塗板面を利用し興味あり活気ある教授の材料を給せんがために編纂したるものなり、」

「六. 本画集は悉く毛筆を以て線描せしが故に固定毛筆画帖教授の上に参考とするも其の得る処亦大なるを信ず、」

本書は教員が使用する毛筆画教材であると書かれている。

・文部省『尋常 小学図画 第一学年 教師用』大阪書籍 昭和8年? 14.8 × 21.1cm
96頁(ページ欠落あり, 奥付も欠落)



文部省『尋常 小学図画 第一学年 教師用』の編集趣旨には非常に明快に教育の目的や教材について説明があるので以下引用したい。

「総説

1. 尋常小学図画は、児童の観察・表現・鑑賞等の能力を育成し、以て生活の拡充を図るを旨とする。
2. 尋常小学図画は、現代に適切な美的陶冶をなし、且国民性の涵養に資するため、最も教材の選択に留意し、又描写の様式の如きも和洋の別に拘泥することなく、児童の性を自由に伸ばすことに力めた。
3. 各学年の教授週数を四十とし、毎週所定の時数に應じて教材を配当した。
4. 尋常小学図画は、これを教師用と児童用に分けた。教師用は各学年一冊づつ、合計六冊とし、児童用は第一学年から第四学年まで各学年一冊づつ、第五学年及び第六学年は更に男児用女児用に分ち、それぞれ一冊づつ、合計八冊とした。
5. 教師用は、各学年に於ける指導の要領並びに全教材の取扱方を説明し、且力めて多く参考の図書を掲げた。
6. 児童用は、図画科の指導上特に必要なもののみを掲げたものであるから、教師用の活用によつて、初めて其の機能を完うすべきものである。

教材

1. 教材は、児童の趣味と理解とを考へ、美的要素に富み、且實際生活に關係の深いものを、出来るだけ広い範囲から選んだ。
2. 教材の種類を次の如く分けた。

教材の種類	{ 表現教材 { 鑑賞教材 { 説話教材 (注9)	{ 自在画 (注10) { 用器画 (注11) { 図案	{ 思想画 (注12)
			{ 写生画
			{ 臨画

3. 児童の発達の程度に應じ、第一・二学年に於いては思想画に重きを置き、これに写生画と図案とを加へ、漸次学年の進むに随つて、思想画を減じ、写生画と図案とを増し、且臨画と用器画とを加へた。鑑賞と説話とは、表現と関連して各学年を通じこれを課することとしたが、特に重要な事項に就いては、別に課を設けた。
4. 教材は力めて各地方に共通なものを探り、実施の容易を期したが、土地の状況によつては、適宜これを変更しても妨げない。但し其の場合には、教師用に示した該課の目的に副ふものたるべきである。又季節に關係ある教材で、地方により変更の必要ある時は、適宜これを繰替へてよい。」

- 文部省『尋常 小学図画 第四学年 教師用』大阪書籍 昭和8年 15.0 × 12.1cm 90頁
- 文部省『エノホン 一 教師用』大阪書籍 昭和16年? 29.5 × 20.9cm 85頁
- 文部省『エノホン 三 教師用』大阪書籍 昭和16年 29.5 × 20.9cm 85頁
長崎県長崎市磨屋国民学校の印あり。
- 文部省『初等科図画一 教師用』大阪書籍 昭和17年 14.8 × 21.0cm 112頁
- 文部省『初等科図画二 教師用』大阪書籍 昭和17年 14.8 × 21.0cm 135頁
- 文部省『初等科図画四 教師用』大阪書籍 昭和18年 14.6 × 21.0cm 174頁

4. 一般美術図書

- 大島支郎『田能村竹田 全』大正元年 26.0 × 16.0cm 全7巻…第一巻78頁, 第2巻82頁, 第3巻90頁, 第4巻84頁, 第5巻78頁, 第6巻56頁, 第7巻82頁

結論

今回調査を行った旧長崎師範学校関係資料中の美術科教育用図書には、明治29(1896)年から昭和19(1944)年までの尋常小学校、高等小学校の毛筆画の教科書、国民学校の図画の教科書、師範学校の図画の教科書、授業資料として全国児童模範作品集や色見本が含まれていることが判った。ただし、これらの図書には長崎大学教育学部の前身、長崎県尋常師範学校(明治19年6月～明治31年3月)、長崎県師範学校(明治31年4月～昭和18年3月)、長崎県女子師範学校(明治41年～昭和18年4月)、官立長崎師範学校(昭和18年4月～昭和24年4月)の印はなく、長崎県東彼杵郡大村高等小学校や長崎県女子師範学校附属小学校、新興善国民学校の蔵書印が押されていたり、生徒や教員、校長のものと思われる名前が書き込まれているものも多かった。恐らく明治29年から昭和19年まで

に長崎県尋常師範学校、長崎県師範学校、長崎県女子師範学校、官立長崎師範学校に所蔵された図書ではなく、後に長崎大学の教員らが研究のために収集した教科書などを相当数含んでいるものと推察される。とはいえ、今回調査を行った旧長崎師範学校関係資料美術科教育用図書は明治29年刊の『毛筆画帖』や『小学 毛筆画手本』など他大学の図書館には所蔵が確認されない教科書も含んでおり、明治29年から第二次大戦終戦直前の昭和19年までの美術科教育史を辿る手掛かりとして貴重な資料ということはできよう。今回調査を行った資料以外にも旧長崎県師範学校関係資料には美術科教育用図書が多数含まれており、今後継続的な調査が必要であると思われる。

注

注1 近藤貞義は安政3年に福井県小浜に生まれる。岸派、漢画を学んだ後、明治12年大津師範学校美術専修科卒業。宮城県尋常師範学校第二高等中学校、鹿児島府の高等中学造士館の図画教員を歴任。明治28年に滋賀県尋常師範学校助教諭となる。大津の淡海堂から明治29年にこの毛筆画教科書『毛筆画帖』を出した他、明治33年に『毛筆習画帖』、明治34年に『小学毛筆画帖』を出版した。金子一夫『近代日本美術教育の研究』中央公論美術出版 1992年 596頁。

注2 臨画とは手本を見て絵を習うこと。また、その絵。

注3 臨本とは図画の手本のこと。また臨写を目的とした手本。

注4 荒木寛畝(あらかき・かんぼ, 1831 - 1915) 日本画家。本姓田中。通称光三郎。江戸に生まれ、東京で没。荒木寛快に文兆派を学ぶ。山内容堂に認められ、安政6年土佐藩絵所預となる。明治6年(1873)ウィーン万国博覧会で受賞。明治7年彰技堂、明治8年天絵社に入門。国沢新九郎や高橋由一に洋画を学ぶ。明治14年には日本画と西洋画を教える画塾読画堂を開いた。明治26年から明治36年まで図画の嘱託講師として東京女子師範に勤務。明治31年東京美術学校教授、のち帝室技芸員となる。洋風技法を加味し写実的な花鳥画を描いた。代表作は《孔雀図》(1890, 宮内庁)。『新潮 世界美術辞典』新潮社 1985年 54頁。金子一夫, 前掲書 750頁。荒木寛畝は毛筆画教科書『小学 毛筆画手本』(金港堂, 明治29年)と『小学 毛筆画帖』(明治35年)を金港堂から出版した。『小学 毛筆画手本』については山形寛『日本美術教育史』(黎明書房, 1967年) 117頁, 121頁, 123頁, 『小学 毛筆画帖』については山形寛, 前掲書, 129頁に記載あり。

注4a 尋常小学校と高等小学校用の『新編毛筆画手本』は上原書店から、高等小学校用の『新編毛筆画手本』は神戸書店からの発行との記録あり。山形寛, 前掲書, 122頁。

注5 岡田三郎助(おかだ・さぶろうすけ, 1869 - 1939) 洋画家。佐賀市に生まれ、東京で没。はじめ曾山幸彦につき、のち黒田清輝の知遇を得て外光派を学んだ。明治29年(1896)東京美術学校助教授。翌年渡仏してラファエル・コランに師事。その後、温雅な作風で官展に重きをなし、美術学校で多くの後進を育てた。昭和12年(1937)文化勲章を受ける。代表作に《某夫人の肖像》(1907年, 東京, ブリジストン美術館)などがある。『新潮 世界美術辞典』新潮社 1985年 230頁。

注6 岡山秀吉(1865 - 1933) 三重県生まれ。東京工業学校にて手工科を修業。千葉県師範学校、秋田市工業徒弟学校等に奉職。明治32年に東京高等師範学校に転じ、昭和4年まで図画手工専修科教官を務めた。上原六四郎とともに文部省『小学校教師用 手工教

科書』(大日本図書, 明治 37 年)の編纂に携わる。著書に『小学校に於ける 手工教授の理論及び実際』(明治 41 年), 師範学校の手工教科書としては上原六四郎, 安部七五三吉との共著『師範学校 手工教科書』明治 42 年がある。山形寛, 前掲書, 394 頁, 407 頁。

安部七五三吉(あべ・しめきち)は明治 7 年大分県に生まれ。明治 34 年東京高等師範学校手工専修科卒業後, 佐賀県師範に赴任。明治 38 年から昭和 16 年まで東京高等師範学校助教授兼訓導となった。主著に『小学校手工作方教方の実際』(培風館, 昭和 3 年), 『手工教育原論』(培風館, 昭和 11 年)がある。安部七五三吉の手工教育説については, 山形寛, 前掲書, 608 - 621 頁。

伊藤信一郎(1886 - 1960)名古屋市生まれ。明治 44 年に東京高等師範学校図画手工専修科を卒業。長崎県師範学校, 岐阜県師範学校教諭を経て, 昭和 4 年から昭和 17 年まで東京高等師範学校に奉職後, 東京工業学校長を務める。主著に『工業大意』, 『手工教授学』(成美堂書店, 昭和 13 年), 『手工教育原義』, 『手工教育精義』等がある。伊藤信一郎の手工教育説については山形寛, 前掲書, 621 - 632 頁。

注 7 和田三造(わだ・さんぞう, 1883 - 1967)洋画家。兵庫県に生まれ, 東京で没。はじめ白馬会研究所で黒田清輝の指導を受け, 明治 37 年(1904)東京美術学校を卒業。翌年白馬会展で白馬賞を受けた。初期文展でたびたび受賞。明治 42 年ヨーロッパに留学, 西洋画と工芸図案を学び, インド, 東南アジアを経て大正 4 年(1915)に帰国した。文展審査員, 昭和 2 年(1927)帝国美術院会員となり, 昭和 7 - 19 年東京美術学校教授として工芸図案を担当した。色彩研究においても多くの業績を遺した。代表作は《南風》(1907, 東京国立近代美術館)。『世界美術辞典』前掲書 1644 頁。

注 8 臨写とは手本あるいは原本を見て書き写すこと。

注 9 説話教材としてクレヨンの扱い方, 色名の説明の頁が挙げられている。山形寛, 前掲書, 535 頁。

注 10 自在画とは定規・コンパスなどを用いず, 手だけで描く画。

注 11 用器画とは, 定規・分度器・コンパスなどの器具を用いて, 物体を点や線による幾何学的図形で表現する技法。土木・建築・機械などの設計に応用。幾何画法。

注 12 思想画の教材として日の丸の旗や軍艦などの絵が挙げられている。山形寛, 前掲書, 535 - 536 頁。

参考文献

- 山形寛『日本美術教育史』黎明書房 1967 年
中村亨『日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系』日本文教出版 1979 年
林曼麗『近代日本図画教育方法史研究』東京大学出版会 1989 年
金子一夫『近代日本美術教育の研究』中央公論美術出版 1992 年
橋本泰幸『日本の美術教育』明治図書出版 1994 年
石山修平他編『教育文化史体系』金子書房 1953 年
『広辞苑』第 5 版 岩波書店 1998 年
『新潮 世界美術辞典』新潮社 1985 年

付記

本稿は平成18年度長崎大学大学高度化推進経費社会貢献・産学連携推進プログラム「地域に貢献する長崎学センターとしての『デジタルアーカイブ』構築と生涯学習のためのeラーニング素材の開発—旧長崎県師範学校関係資料公開のための目録化—」による調査報告の一部である。